

特集「東京とオリンピック・パラリンピック」

## 日本体育大学と1964年東京オリンピックの経験と記憶<sup>1</sup>

富田 幸 祐（オリンピックスポーツ文化研究所）<sup>2</sup>

関根 正 美（体育学部／体育スポーツ科学系）<sup>3</sup>

### Abstract

While there has been mention of Tokyo Olympics' impact on NSSU, there has been little clarification on specific related facts. The purpose of this paper is to clarify the effects of the interaction between NSSU and the 18th Olympics held in Tokyo. To do so, recollections and round-table discussions (meetings) held at that time between NSSU-related persons were examined, together with related documentation stored in the historical documents office at NSSU Centenary Hall (NSSU archives).

First, it became clear that the Tokyo Olympics were talked about during the round-table discussions. With respect to the sporting event's impact, the tone of the discussions was one of cool and critical perspectives rather than enthusiasm.

Second, this study clarified the actual level of participation by NSSU-related persons in the Tokyo Olympics—based on the historical documents, over 400, including teaching staff and students, were involved in the capacity of athletes, officials, and operations staff.

Third, this study revealed what was discussed in retrospect regarding the Olympic experiences. Insights were gained after listening to individuals recount Tokyo Olympics' impact on the students. It was indicated that memories of the sporting event grow weaker with each new generation coming of age.

This raises the question as to how the university can best be engaged in the upcoming 32nd Summer Olympics.

### 抄録

これまで、東京オリンピックの開催が日体大に影響をもたらしたことが言及されてきているが具体的な事実についてはほとんど明らかにされていない。本稿の目的は日本体育大学と第18回東京オリンピック競技大会（東京）のかかわり方について、当時の日体大関係者による座談会や回顧、

---

<sup>1</sup> NSSU and the Experiences and Memories of Tokyo Olympics (1964)

<sup>2</sup> Tomita Kosuke, Research Institute for Olympic and Sport Culture

<sup>3</sup> Sekine Masami, Faculty of Sport Science

回想、そして日体大百年史料室に所蔵される関係史料を用いて明らかにすることである。

第一に、当時の日体大の教員による座談会で東京オリンピックに関し何が語られていたのかを明らかにした。座談会では、東京オリンピック開催が与える影響に対し、熱狂的というよりかは、冷静に批判的な立場でもって議論が行われていた。

第二に、実際に東京オリンピックには日体大関係者がどれほど参加していたのかを明らかにした。史料から確認できる範囲でいえば、実際に選手や役員、運営スタッフとして東京オリンピックに教員学生合わせて400人以上が関わっていた。

第三に、こうしたオリンピックの経験が後にどのように語られているかを明らかにした。個々人の語りからは東京オリンピックが学生に及ぼした影響を垣間見ることが出来た。また東京オリンピックの記憶が世代を経るごとに薄れているという指摘がなされていた。

日体大に残る東京オリンピックの経験と記憶は、第32回夏季オリンピック大会を控えるいまにも、その関わり方に関する問いを投げかけているのである。

Keywords: Nippon Sport Science University, NSSU archives, University and Olympics

キーワード：日本体育大学、日体大百年史料室、大学とオリンピック

国書刊行会：東京，pp. 91-92.

## はじめに

(東京オリンピック女子選手村の一引用者注)  
職員の手足となって働いた事務補助員は日本体育大学の素直な女子学生部隊。私には彼女たちはスポーツを勉学する学生ということで、何か東京オリンピック成功への使命を感じているのではないかとさえ思われた。

女子村は、男子禁制、そのため男子がすべきベッドの移動、物品の運搬も彼女たちは積極的に引き受けた女子村の原動力であった。雨の日も嵐の日も八〇〇m離れた選手本部へ連絡のため自転車を飛ばしてくれた。

けれどもまた一方、この東京オリンピックで最も多くのことを学び、体験したのもこの日体大生の一群である。なぜなら彼女たちはこのオリンピックで世界的な大選手と接することが出来、高度なスポーツ技術と国際的な団体生活の運営、国際理解の三つの体験を一度に得ることが出来たのだから

奥山真 (1988) 東京オリンピック女子選手村。

本稿の目的は、1964年に東京で開催された第18回夏季オリンピック競技大会（以下、東京オリンピックと称す）に対し、日本体育大学（以下、日体大と略す）がどのような形で関わっていたのかを明らかにすることである<sup>1)</sup>。

日体大と東京オリンピックの関わりについて大学年史を確認するといくつかの言及を確認することが出来る。『学校法人日本体育會日本体育大学八十年史』には、日体大が年間計画を変更し「全学的な協力体制」であったことが記載されている<sup>2)</sup>。また『学校法人日本体育会百年史』では、『八十年史』と同様の「全学的な協力体制」の他に、10月3日に行われた東京オリンピック開会式の予行練習に621名が出場したことと「補助役員として多くの学生・教職員が協力」したこと、「このオリンピックのあとに『日本』（にほん）体育大学は『日本』（にっぽん）体育大学としてその呼称を改めた」ことが記載され、「日体大に及ぼしたオリンピックの影響は大きかった」という<sup>3)</sup>。

『八十年史』に記載される「全学的な協力体制」

とは『百年史』に記載されるところの予行演習出場や補助役員としての参加のことを指していると思われる。しかし、これ以上の具体的な日体大と東京オリンピックの関わりについてはどちらの年史にも言及がなされていない。その意味で本稿は大学の年史を補完するという役割を持っている。

オリンピックと大学の関係についてはオリンピックにおける学生選手の参加比率に焦点を当てた向井<sup>4)</sup>、中澤<sup>5)</sup>、東原<sup>6)</sup>の研究がある。また森は中央大学出身のオリンピックに焦点を当てて中央大学とオリンピックの関係について論考を発表している<sup>7)</sup>。しかしこれらはオリンピックとしてオリンピックに関わった大学生に焦点を当てたものであり、大学そのものがオリンピックとどのような関わり方をしたのかについて検討を加えたものではない。また『中央公論』では、「オリンピックの歴史を振り返ると、大学抜きには考えられない」<sup>8)</sup>ことから、「大学とオリンピック」と題し2019年11月号から連載している<sup>9)</sup>。

第32回夏季オリンピック大会の東京開催を控え、各大学にはボランティアなどの「ささえる」立場としての大学生の参加が求められている。前回大会において大学はいかに東京オリンピックを「ささえる」ことになったのか。そして東京オリンピックの開催をいかに受け止めようとしていたのか。2度目の東京開催を前に前回大会の大学とオリンピックの関わりについて個別具体的な事例から解き明かすことは意義あるものとする。

本稿で用いる主な史料は日体大百年史料室所蔵の「東京オリンピック関係文書（庶務課）」に所収の史料、『学友会誌』、『日体大同窓会回顧録』である。これらの史料によって日体大と東京オリンピックの関わりについて、その具体的な位相を描き出す。

## 1. 1964年東京大会の意味

1964年の東京オリンピックが日体大にとって大きな意味を持ったことはこれまで指摘されてい

る。大会終了後に改めてオリンピックが与えた影響を記述するのとは別に、日体大ではその後影響が大きかったと言われる大会を前に大学関係者はオリンピックをどうみていたのか。この問題を1964年発行の『学友会誌』を読みながら考察してみたい。

『学友会誌』の1964年発行号では大会前に、「オリンピックと体育会を語る」と題した座談会を企画している。出席者は、栗本義彦学長、石津誠教授、佐々木吉蔵教授、原田忠四郎助教授、司会を編集委員が担当している。

### 1-1. オリンピックと学校体育

たとえば、2020年東京大会を前にして座談会を企画するとしたら、まずどのような話題から始めるだろうか。オリンピック自体の成功を願って、ドーピングや政治の問題があればそれらから、あるいは日本選手団の活躍や国民の盛り上がりについてなどであろうか。1964年の座談会は、それらとは全く別の「学校体育問題」から始めている。これは司会の質問者が「国際スポーツ大会、東京オリンピック大会を通じて体育界に及ぼす影響を学校体育、社会体育の立場からみてお話して戴きたい」<sup>10)</sup>と述べて、テーマを予め学校体育および社会体育との関わりから論じる設定にしていることによる。けれども、このテーマ設定が今日のオリンピックへの関心から見たときに意外な印象を与えることも事実であろう。

以下、発言を追いながら座談会を振り返ってみる。

まず、出席者の中で最初に発言した石津は次のように述べている<sup>11)</sup>。

この問題は学校体育の在り方とオリンピックをどう受け止めるかの問題であり、学校体育は三本の柱（社会性の向上、心身の発達の向上、高度の技能追求）があり、その目標にオリンピックがどのように影響するかということであれば小・中学校における四本の柱、高校における三本の柱は不

動のものであり、オリンピックの影響を受けても  
なんら変りはしないといえますね

石津誠は我が国の戦後の体育哲学研究の基盤を作った研究者の一人である<sup>12)</sup>。また、石津は現在の日本体育学会体育哲学専門領域のルーツとなる体育原理専門分科会における体育原理研究会代表として不昧堂出版からの書籍刊行企画に関与している。その第一号である『体育の原理』の「まえがき」で石津は次のように述べている<sup>13)</sup>。

戦後の学校教育は大きく揺れ動いて来たがその中に在って、体育をどのように考え、どのように進めるかということは、生徒の幸福を旨とし、民主主義の理想を実現するという教育本来の構想を基底として立たなければならないが、現実の生活や国家社会の進展に順応した、体育という実際の教育活動は、理論的にも、あるいは実践的にも、十分時間をかけて検討し究明しなければならない問題であると思う

この1971年の文章で、石津は体育を教育活動として究明すべきであるとの立場を表明している。石津の体育を教育であると規定する立場は、現在の体育哲学の水準に照らし合わせて妥当なものである<sup>14)</sup>。

石津がオリンピックの影響を体育の問題に限定して影響なしとする見解に対して、栗本学長と佐々木教授は異なる見方をしている。栗本は、「学校体育には直接の影響はないが、少しずつ今後影響され、やがては根本的なものになってきて問題は数多く残されると思う<sup>15)</sup>」と述べる。司会がオリンピックの影響は学校体育に直接及ぼすものではないとしても、別の影響を栗本学長に問いかける。それが見るスポーツの加速である。ここで司会者は、たとえばイギリスのようにスポーツが文化として根付いていると言われる事態は、スポーツ観戦ではなく市民がスポーツを行うことを意味すると解釈している。それに対して、オリンピッ

クを機にマスコミの影響力の増大とともに「ただ見るだけのスポーツ」<sup>16)</sup>の傾向が強くなるのではないかと、やや批判的なニュアンスで栗本に問いかける<sup>17)</sup>。それに対して、栗本はマスコミなどの影響でスポーツと生活の関係が見るだけのものになる傾向を肯定したうえで、次のように述べる<sup>18)</sup>。

またもう一つの心配は、陸上競技において競技に強い選手をみて、ああいう練習をすればすぐ一流選手になれて強くなるんじゃないか、という、出来上がったものを初心者が見て、彼等の練習法そのままを真似してしまうというやり方になる恐れがないかということなんだが

この発言内容は、先ほどの司会者が述べた見るスポーツ偏重の問題とは性格が異なり、視覚情報の増大が選手にもたらす影響を述べたものである。選手が一流選手の練習法をすべて真似してしまうならば、確かに弊害も出るであろう。中高生がウサイン・ボルトのフォームをまねしても記録が伸びるかどうかは身体構造が異なる点で不明であるし、故障につながる可能性もあるだろう。野球のイチロー選手の振り子打法を中高生が真似することも同様である。

栗本の発言において、文字には表現されていないと同時に意味として語られているのは、コーチングの不在である。中学で初めて競技を始める人が一流選手の練習を真似て不都合が生じるとしても、それにアドバイスを与え矯正するコーチ（指導者）がいれば問題はない。コーチング活動が不在であれば、栗本の危惧は顕在化するであろう。しかし、コーチング活動が適切になされるのであれば普通は回避できると考えられる。

佐々木はオリンピックと学校体育の問題について、これまでとは異なる観点から問題提起をしている。それは、オリンピックの影響を学校体育の発展に生かすべきという論で、いわば学校体育の科学化という視点である。次のように述べている<sup>19)</sup>。

オリンピックは青少年の体育の振興に相当いい刺激を与え、また影響を及ぼすことは事実であると思うが、その影響を良い方面に活用せねばならないのであって、現在の日本の学校体育は、戦後特にただ漠然と肉体を動かしている傾向があるので、これを科学的、合理的、組織的に研究し、学校体育を促進させねばならない。その意味で東京オリンピック大会は、学校体育に反省を加えるいい機会であり、学校体育の目標は目標として考え、目標をつかんだ体育はいかにあるべきか考慮されねばならぬことで、それがなければ選手強化に引きづられていくのではないか

佐々木がここで述べる体育の目標は、この発言の十二年前に著された著書に述べられている。すなわち、「体育の目標はどこまでも全人的発達を旨とするものであらねばならない」<sup>20)</sup>という目標観である。佐々木は教育理念が不変である限り体育の目標も不変であると考える一方で、オリンピック効果による学校体育の変革を主張している。その中心は、1964年の発言に照らし合わせるならば、科学的、合理的、組織的ということである。科学的は身体運動を科学的に行うという意味で理解できる。問題は合理的、組織的に学校体育を研究するとは何を意味するかである。

佐々木の問題意識は「ただ漠然と肉体を動かすだけの体育」からの脱却にあったとみてよいであろう。肉体を動かすだけの体育をどこにシフトさせようというのであろうか。1964年から十二年後の1976年の『日体大学友会誌』に、それをうかがわせる内容が書かれている。1976年（昭和51年）の教育課程審議会答申についての論評である<sup>21)</sup>。

いうまでもなく、教育課程の改善は、学校教育改革の第一歩にすぎない。教育課程とともに教育条件の改善や環境の整備が重要で、その環境条件の中に優れた教師が期待されていることを我々は知っている。そこで今回の教育課程では、歴史的

にみて長い間ややもすれば体育すなわち技能教科、体育教師即技能指導者と考えられがちであったそのイメージからようやく脱出し、いっそう人間教育の中核的地位を占めるよう期待されていると理解し、内容並びに学習指導効果へ力点を向けるべきであろう

体育は単純な規律訓練ではない。運動を教えるといっても、それは人間を相手にした行為である。したがって、マニュアル通りに教えてもその効果は一律には現れない。人間の身体、心理、環境条件が違えば身体運動のパフォーマンスに与える影響も異なる。学校体育であれば生徒や児童個々の発育発達の差や身体諸能力の差が、教師の教え方を左右する場合もあるだろう。技能指導者から人間教育の担い手へと体育教師のイメージを変えるには、学習内容を吟味し学習指導効果に力点が置かれなくてはならないと佐々木は述べる。1964年の発言と併せて考えるならば、肉体運動と技能指導に集約される学校体育を合理的かつ組織的に学習効果を伴った人間教育へと変えることを佐々木は述べている。合理的かつ組織的に学校体育の内容および指導効果を変えうる研究領域は、今日で言えば体育科教育学であろう。佐々木の中でオリンピックの影響は今日で言えば授業研究や教材論との関係で考えられていたのである。

## 1-2. オリンピックの受け止め方

座談会は社会体育の問題へと移るが、この論点はオリンピックの影響という点から不明瞭のまま進んでいる。実際に社会体育との関係を語る4名の座談会出席者の発言の中に「オリンピック」の言葉が一度も出てこないのである。総じてここでの談論は、1964年の時点で社会体育は振るわないが、「社会体育は政策的意図と民衆の内的要求によって、今後ますます発達していくということですね」<sup>22)</sup>との司会のまとめで終えられている。

石津の発言量が増すのは、「オリンピックの受け止め方」に話題が及んだときである。石津の発

言内容の構造を大まかに示しておく、まず現代(1964年当時の)オリンピックの特徴を三点列挙し、その三つの観点から日本におけるオリンピック政策の現状分析を行い、さらにオリンピックが準備されている段階で教育が受ける影響について言及されている。

石津が認識するオリンピックの現実的特徴は、①民族の戦いという点がクーベルタンの理念とかけ離れてしまい、IOCでも問題視されている②最高度のスポーツ技術の発揮には教育的意図がみられない③学校教育からみても、また青少年スポーツの振興から見ても現実のオリンピックはゆがんだ影響をもつ、という点である。いずれもオリンピックの現実に対して肯定的ではなく、批判的な意見が述べられている。

ここから石津が導くオリンピック政策の分析は次の四点である<sup>23)</sup>。①急増的な選手養成②技術の科学的研究の促進③施設の整備拡充④経費を必要とするので政治がスポーツに介入している点に感傷的なものが出て来ているのではないか。

これらを踏まえた上で、このような政策によって養成された競技者が英雄として特権的存在になることと、学校体育が技術重視になってスポーツと混同される恐れがあることの二点を、教育的影響としている。ここでの石津の学校体育観もまた、オリンピックとは異なる価値を有する教育的営為であるという点で揺るぎはない。石津が日本に於ける体育学の学的基礎づけに関する認識を代表する立場<sup>24)</sup>であったことを考えると、この石津の認識は個人的見解にとどまらず体育学としての認識であったと考えてよい。学校教育現場にオリンピックムーブメントを醸成し、それによって体育改革を成し遂げる点に、石津が1964年東京大会を解釈し批判する思想があった。

石津の体育観からみた1964年東京大会への批判的な考えについて、石津とともに体育原理の領域を作り上げた前川峯雄が石津の日本体育大学退職に際しての記念論集に次のように書いている<sup>25)</sup>。

先生は体育原理のすぐれた業績をおあげになられて原理分科会が出来たころ同じ会員として横にはべらしていただくようになってからですが、一番思い出に残っていることの一つは、オリンピック東京大会(昭和三十九年)がすんだとき、日本のスポーツ界がそのおかげで、随分横道にそれていき、これをまともな姿にかえして、国民スポーツの普及をはからなければならないと主張されて、原理分科会が全国に檄をとばしたとき、先生はその中心的存在でした。エリートスポーツの勝利のために随分がまんしてきた大衆に、スポーツをとり戻そうというのですが、この主張、これは今日もはや常識となっていますが、その先見の明に感心したのでした

前川が「原理研究会が全国に檄をとばした」と述べるのは、1964年の東京大会終了後の1965年1月1日付けで日本体育学会体育原理専門分科会が代表者日本体育大学教授石津誠名で発表した声明文を指す。この声明文は文部省、日本体育協会、各県教育委員会などに送られ、新聞などでも取り上げられたという<sup>26)</sup>。この声明文で述べられていることを簡潔にまとめるならば、オリンピック東京大会を契機として日本のスポーツが発展する一方で、すべての国民にスポーツ享受をもたらすために体育スポーツの在り方を反省するということである。

石津は座談会の中でオリンピックの「遺産」についても語っている。石津が語る「遺産」とは次の四点である<sup>27)</sup>。①残される記録の意義②スポーツの技術的評価の偏重③選手第一主義の思想が残る④政治がスポーツ運営について精神的に干渉するようになる。ここで石津が述べる「遺産」は、現在のオリンピックで重視されている「レガシー」とは部分的に異なる。現在使われているレガシーについて、荒牧は「レガシーは多様な概念であるが、オリンピック競技大会を一過性の経済効果だけでなく、長期的な観点からみた都市の持続可能な発展を目指して考えられたものである」<sup>28)</sup>と述

べている。それに対し石津が1964年の時点で考えたレガシーとは、先の②、③、④にかぎって言えば、むしろオリンピックの「負の遺産」の意味に近い。③の「選手第一の思想」にしても、文脈から解釈すると現在のいわゆる「アスリートファースト」とは異なる意味である。それは、競技力向上主義ともいうべき、すべての国民のスポーツ享受がなおざりにされる原因としての選手第一主義である。石津は共産圏の競技力向上策がオリンピックに与える影響を危惧しつつ、「現在のままでは純然たるアマチュアスポーツ精神に反し、そのような養成を除かなければ、オリンピックの根本精神たる“参加すること”に意義がなくなるのではないか」<sup>29)</sup>との考えを示している。ただし、①の記録の意義については、オリンピックが人類の達成行為を後世に記録という形で残すという意味において、言葉の意味通りの積極的な「遺産」と考えられる。

### 1-3. コーチング問題

最後の話題は日本のコーチ制度についてである。司会が現代日本のコーチ制度について話を促す形で始まるのだが、この部分は「オリンピック」という言葉が一度も出てこない。座談会の中で奇妙な位置づけである。

まず佐々木が日本のコーチの現状について、学校では体育教師がクラブのコーチも兼ねている現状を踏まえて教師の加重負担を指摘している。それを受けて石津が日本に於けるコーチ学の不在を指摘した上で体育教師とスポーツコーチは二分された方が良いとの考えを示している。それに同意しつつ佐々木は、「日本の学校体育も体育教師と、コーチとに分れる制度をとれば一番いいことになる」と述べる。さらに佐々木は当時の日体大の教育にも次のように言及している。「しかも日本では、コーチングの研究は非常に遅れていて、この分野を掘り下げて考えれば、本学で学んだことだけではとても足りないのです」。佐々木はコーチング研究の不足を語る。しかしあくまでも学校体

育が基礎にあるべきとの立場は堅持されている。原田助教授が「本学としてももっと専門的にコーチ学の研究をしなければなりませんね」と問いかけたことに対し、佐々木は「そうですね。日本の場合はやはり、コーチ制度は学校体育の中でまず初めに地固めして行かねばならないのではないか」と答えている<sup>30)</sup>。

ここまでの話題は、日本におけるコーチ制度についての一般的な状況認識と考察が進められてきた。これを受けて石津は大学におけるコーチ学の必要性を次のように説く<sup>31)</sup>。

専攻学生を持っている体育学部・体育学科で、現在は体育教師のコース一本しか持っていないが、このコースを分ける必要がありますね。例えばコーチのコース、教師のコース、専門的な学問研究のコース（体育学）というようにすれば学校体育と社会体育とに分ける必要がそこに生じてくると思うが、今のところはあいまいですね

この座談会では最終的にコーチ学確立の必要性が説かれ、大学教育におけるコーチ学の教育を念頭においたカリキュラム創設の可能性が石津によって言われている。このようにして、座談会は佐々木の「社会教育の現状では弱いですが、そういう時期も間もなくくると思いますね」<sup>32)</sup>との発言を最後に司会によって締めくくられている。

### 1-4. オリンピックへの批判と学的先見性

以上、オリンピックを前にして日本体育大学の教員による座談会を解釈してきた。その特徴を二点ほど述べておきたい。まず第一点は、オリンピックを前にして期待が高まる趣旨の発言が少ないことである。現在では広く知られるようになったオリンピックムーブメントに関する発言もない。座談会そのものの興味関心の中心は学校体育だったのであり、オリンピックから学校体育のありかたを語るという姿勢が認められる。期待されているのはオリンピックそのものというよりも学校体育

のありかたであった。第二点は特に石津による遺産への言及、コーチ制度への提言などの先進性が認められることである。オリンピックの遺産は「レガシー」という言葉で現在は浸透しつつある。部分的にはあれ、残される記録の意義をオリンピックの遺産と考えた点は、「レガシー」が重要な意味を持ちつつある現代のオリンピックに照らし合わせて考えるならば、先見の明があったというべきであろう。また、スポーツ庁の委託事業を受けて日本体育大学でもコーチングアカデミーが開設運営されるようになった。座談会で言及された話題には、これら現在で普及しつつある現象を先取りした見解が見られた。

座談会はあくまで教員の職にある立場からのもので、学生が実感したオリンピックと異なる可能性がある。しかし、日本体育大学では1964年大会を迎えるにあたって少なくとも教員の立場では熱狂というよりも冷静さを保った中でオリンピックを迎えつつあったといえるであろう。

## 2. 日体大関係者の東京オリンピック「参加」記

1964年4月に女子短期大学部に入学した竹本(旧姓村上)孝子は、慣れない寮生活と全日本体操祭に向けた練習の日々という入学初年度の前期を送っていた。前期が終わり、夏休みを故郷で過ごした彼女が9月1日から始まる後期授業のために上京すると、「始業式もないまま」オリンピックが終わるまでの約二ヶ月間、学校は休講であることを知ったという<sup>33)</sup>。

表1は1964年度の日体大の年間スケジュールである<sup>34)</sup>。休暇は、夏季休暇が7月13日～8月31日まで、冬季休暇が12月13日～1月18日、春季休暇が3月6日～4月11日と設定されている。また6月6日～11日の新潟国体と10月10日～10月24日の東京オリンピックの期間は校外研修と位置づけられている。竹本が「国体休暇で帰省出来た時のうれしさ」を語っており、この校外研修は自身がその大会に関わらない限りにおいては

実質上の休暇であったようだ。そうすると東京オリンピック期間も人によっては休暇であったとみなすことはできそうだが、竹本のこのような約2ヶ月間の休講は確認できない。後期日程は9月1日の始業式から開始となっている。

とはいえ年間スケジュールに載っている計画の中には例年と状況が違うものもあった。例えば水泳実習は東京オリンピックのあおりを受けて例年より1週間遅れで日程が組まれた<sup>35)</sup>。また1964年は実演研究会が東京オリンピック開催のため中止となっており、「本学最大の行事」である体育祭もオリンピックの影響で開催が危ぶまれていたという。準備を掌る学友会総務部の「七人中三名が選手村で活躍」しており「企画するにも電話にて連絡を取るというありさまで」計画は遅々として進まなかった。総務部全員が総務室に集まるのが出来たのは体育祭開催10日前の11月6日のことであった。こうした状況に加え大藤茂樹は「九月以来皆無と言って良い程授業を行っていない」こと、そして「これ以上体育祭の練習で授業をつぶせぬ方針」の中で体育祭開催に向け準備に取り組んだことを述べる<sup>36)</sup>。竹本と同様、後期の授業が行われていないことが、ここにも書き残されている。

図書部顧問であった原田忠四郎助教授は日体大の関係者の多くが東京オリンピックに関わったとして、その活躍を端的にこう評している<sup>37)</sup>。

学長をはじめ多くの教官が、幹部として全体計画に参加し、教官および学生が直接選手として、多くの金・銀メダルを獲得し、また多くの者が補助役員として大会の円滑な進行を成就した

本章では竹本や大藤によって語られた「休講」そして授業が「皆無」であったことを念頭に置きつつ、東京オリンピックの「円滑な進行を成就」すべく尽力した日体大関係者の諸相について見ていく。



表1 1964年度年間スケジュール

前期		後期	
4月13日	始業式	9月1日	始業式
4月15日	入学式	9月20日	開学記念日
4月18日	新入生歓迎学友会	10月10日～24日	校外研修（東京オリンピック）
5月2日	学友会総会	11月15日	第73回体育祭
5月17日	体操祭		創立七十周年記念
5月18日～30日	都内学校参観（学四、短二）	11月27日～30日	卒業学年追試験
5月26日～30日	健康診断	12月5日	卒業論文提出締切日
6月6日～11日	校外研修（新潟国体）	12月7日～11日	卒業試験
6月15日～7月4日	教育実習（学四、短二）	12月13日～1月18日	冬季休暇
6月26日～30日	昭和38年度後期追試験	1月2日～3日	箱根駅伝
7月1日～10日	前期試験	1月8日～14日	スキー実習（学三、短一）蔵王
7月13日～8月31日	夏季休暇	1月18日	始業式
7月13日～24日	水泳キャンプ実習（学二、短一）	1月22日～26日	卒業試験第一次追試験
8月25日～26日	体育学会	2月4日～5日	スケート実習（学四、短二）
	大学保健体育協議会	2月15日	学友会総会 卒業生送別学友会
		2月16日	卒論発表会
		2月17日～21日	昭和39年度前期追試験
		2月22日～3月4日	後期試験
		3月3日	卒業式
			創立記念日
		3月4日	修了式
		3月6日～4月11日	春季休暇
		4月6日～7日	昭和40年度入学式

2-1. 選手, 監督, コーチ, 役員としてのオリンピック「参加」

東京オリンピックに選手, および監督・コーチとして参加した日体大関係者は全部で17名であり最も多いのは体操の9名である<sup>38)</sup>。この内10名が日体大所属であり, 在学生在が3名, 教員が7名である。

日体大所属の10名については各競技種目団体や日本オリンピック委員会から派遣依頼書が大学宛に届いている<sup>39)</sup>。それらの資料を表3の通り整理すると, 強化合宿, 選考会, 本大会と4月～10月にかけて断続的に各自大学からの配慮を受けて校務や学業を離れていることが確認できる。5名が選ばれていた体操は6月から東京オリンピックが開かれる10月まで, そして大会終了後も全国各地での報告会実施のため11月7日から

12月11日まで断続的に日本体操協会によって招集を受けていた<sup>40)</sup>。

飛込では大坪敏郎と大崎恵子が4月15日から4月30日, 5月1日から5月14日, 5月15日から5月25日, 5月26日から6月8日, そして本大会では10月1日から25日の間に召集されていた<sup>41)</sup>。ただし8月26日には大学の宿直室に大坪敏郎, 大崎恵子からオリンピック合宿のため10月末まで学校に出られないとの連絡が入っており, 上記の日程だけでなく8月下旬から10月末まで両名とも大学に来られない状況が続いたようである<sup>42)</sup>。

この他, フェンシングの保井多美子は8月16日から26日, 9月5日から15日, 9月20日から9月30日, 10月1日から10月28日<sup>43)</sup>, レスリングの花原勉は9月17日から10月25日とそれ

表2 64年東京オリンピック出場選手監督コーチ一覧

氏名	生年月日	歳	所属		
大坪敏郎	1943年2月26日	21歳	在学中	飛込	選手
大崎恵子	1942年10月15日	21歳	在学中	飛込	選手
竹本正男	1919年9月29日	44歳	日本体育大学	体操	監督兼ヘッドコーチ
城田由美子	1935年1月16日	29歳	跡見学園短期大学	体操	女子コーチ
荒川御幸	1934年3月15日	30歳	國學院高校	体操	女子チームリーダー
鶴見修治	1938年1月29日	26歳	日本体育大学	体操	選手
山下治広	1938年11月15日	25歳	日本体育大学	体操	選手
相羽好弘	1941年4月4日	23歳	法政二高	体操	選手
池田敬子	1933年11月11日	30歳	日本体育大学	体操	選手
相原俊子	1939年6月3日	25歳	主婦	体操	選手
千葉吟子	1938年2月25日	26歳	日本体育大学	体操	選手
花原勉	1940年1月3日	24歳	日本体育大学	レスリング (グレコローマン)	選手
桜間幸次	1938年2月12日	26歳	自衛隊体育学校	レスリング (グレコローマン)	選手
藤田徳明	1941年1月10日	24歳	日本体育大学	レスリング (グレコローマン)	選手
井口幸男	1911年9月19日	52歳	慶応高校	ウエイトリフティング	監督
坂上光男	1910年11月8日	54歳	奈良県立橿原公苑	バレーボール	監督
保井多美子	1942年6月3日	22歳	在学中	フェンシング	選手

日本体育協会 (1965) 第18回オリンピック競技大会報告書. 日本体育協会: 東京. pp. 319-385 を基に筆者作成

表3 選手派遣日程

競技種目	日程		氏名						
体操	6月3日~9日	第一次選考	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治	相原信行	香取光子	鈴木麗子
	7月23日~29日	強化合宿	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治	相原信行	香取光子	
	8月8日~16日	強化合宿	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治	相原信行	香取光子	
	8月18日~26日	強化合宿	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治	相原信行	香取光子	
	9月2日~9日	強化合宿	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治			
	9月10日~21日	強化合宿	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治			
	9月23日~29日	強化合宿	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治			
	10月1日~10月24日	本大会	池田敬子	千葉吟子	山下治広	鶴見修治			
飛込	4月15日~4月30日	強化合宿	大坪敏郎	大崎恵子	葛目千鶴子				
	5月1日~5月14日	強化合宿	大坪敏郎	大崎恵子	葛目千鶴子				
	5月15日~5月25日	強化合宿	大坪敏郎	大崎恵子	葛目千鶴子				
	5月26日~6月8日	強化合宿	大坪敏郎	大崎恵子	葛目千鶴子				
	10月1日~25日	本大会	大坪敏郎	大崎恵子					
フェンシング	8月16日~26日	強化合宿	保井多美子						
	9月5日~15日	強化合宿	保井多美子						
	9月20日~9月30日	強化合宿	保井多美子						
	10月1日~10月28日	本大会	保井多美子						
レスリング	9月17日~10月25日	本大会	花原勉						
陸上	5月5日~5月12日	強化合宿	渡辺和夫						
カヌー		第三次候補選手選出	西川英子						

ぞれ派遣依頼書が届いている<sup>44)</sup>。各競技種目のオリンピックは、少なくとも9月以降は大学に来られる状況ではなかったことが伺える。

また本大会の出場は叶わなかったが候補選手と

して派遣依頼がなされていた選手が他に5人いる。体操では鈴木麗子が6月3日から9日、相原信行と香取光子が6月3日~9日、7月23日~29日招集、陸上の渡辺和夫<sup>45)</sup>は、カヌーの西川

表4 大会役員一覧

氏名	日程	派遣概要
佐々木吉蔵	4月11日～4月12日	第48回全日本選手権大会マラソン、競歩50km 兼第19回毎日マラソン大会競技役員
	9月1日～10月末日	財団法人オリンピック東京大会組織委員会競技特別委員会委員
山田良樹	5月26日～6月20日	日本陸上競技連盟第18回オリンピック大会陸上競技運営本部競技部副総務
石津誠	5月30日～31日	体操競技第一次選考競技役員
竹本正男	5月30日～31日	体操競技第一次選考競技役員
日高義晴	5月30日～31日	体操競技第一次選考競技役員
進藤満志夫	8月27日～8月30日	全日本6人制バレーボール総合男女選手権大会役員
	9月14日～10月24日	オリンピック東京大会競技役員（バレーボール）
中山隆治	9月3日～10月24日	聖火リレー国内コース派遣員、陸上競技表彰役員
相原信行	9月5日～13日、9月25日～29日、10月9日～15日	国際審判員講習会における祭典試技委員とその強化合宿の実施
香取光子	9月5日～13日、9月25日～29日、10月9日～15日	国際審判員講習会における祭典試技委員とその強化合宿の実施
河田新吉	9月10日～13日	体操競技役員研修会
日高義晴	9月10日～13日	体操競技役員研修会
青山敏彦	9月10日～13日	体操競技役員研修会
鈴木蘭子	9月10日～13日	体操競技役員研修会
松元正竹	9月10日～13日	体操競技役員研修会
岡野章	9月25日～10月24日	オリンピック東京大会競技役員（陸上競技）
江尻忠夫	9月25日～10月24日	オリンピック東京大会競技役員（陸上競技）
中田茂	10月6日～24日	コーチ団連絡本部所属（調査資料収集）
宗内徳行	10月6日～24日	コーチ団連絡本部所属（調査資料収集）
稲垣安二	10月10日～10月24日	オリンピック東京大会競技役員（バスケットボール）
荒木郁夫	10月10日～10月24日	オリンピック東京大会競技役員（バスケットボール）

英子<sup>46)</sup>、飛込では葛目千鶴子が本大会前に派遣依頼を受けていた。

選手や監督、コーチ以外にも役員として招集を受けた関係者がいる。史料が残っている関係者は表4の通りである。大会中に限定すると佐々木吉蔵教授<sup>47)</sup>が東京オリンピック組織委員会競技特別委員会委員および陸上競技運営本部競技部副総務として9月1日から10月末日まで、中山隆治助教授<sup>48)</sup>が聖火リレーの国内コース派遣員および陸上競技表彰役員として9月3日～10月24日まで、岡野章助手<sup>49)</sup>と江尻忠夫<sup>50)</sup>が陸上競技役員として9月25日～10月24日まで、中田茂教授<sup>51)</sup>と宗内徳行専任講師<sup>52)</sup>がコーチ団連絡本部所属（調査資料収集）として10月6日から24日まで、体操代表選手候補であった相原信行専任講師<sup>53)</sup>と香取光子<sup>54)</sup>は9月に入ると補欠選手となり、国際審判員講習会での試技メンバーとして10月9日～15日まで、進藤満志夫助手<sup>55)</sup>がバレーボール競技役員として9月14日から10月24日まで、稲垣安二助教授<sup>56)</sup>と荒木郁夫専任講師<sup>57)</sup>がバスケットボール競技役員として10月10日～10月24日まで、それぞれ招集を受けている。

## 2-2. 学生たちのオリンピック「参加」

大学3年生であった小川成義が「後期始業式の翌日九月二日から十一月五日まで、僕は綿井先生以下七十七名の学友と共に輸送課の補助役員として働くことができた」<sup>58)</sup>と語っている様に、大会出場選手や役員だけでなく、大会を支える運営スタッフとして学生が参加していた。史料より確認できる範囲だと、学生300名が9月初めから選手村で「二か月間の村生活」を送り<sup>59)</sup>、他にも甲州街道でのマラソン、競歩の「練習管理役員」として62名の日体大学生が9月15日～10月20日まで派遣された<sup>60)</sup>。またパラリンピックにも健康学科の学生が100人補助役員として参加している<sup>61)</sup>。

補助役員としてのオリンピック参加は部活動単位でも確認できる。体操競技部からは、補助役員として学生14名が派遣された<sup>62)</sup>。派遣された中には日本体育大学名誉教授の瀧澤康二の名前を見つけることができる。

この頃の瀧澤は「オリンピック大会出場を目指して必死で頑張って学生生活を送っていた」。1964年は大学4年生で、体操部の主将として450名ほどいた部員を東ねインカレ団体戦で優勝を果

す。しかし東京オリンピックには選手としてではなく補助役員としての参加となり、オリンピック出場の「夢は果せなかった」。瀧澤はオリンピック出場という「夢を断念」、その後選んだ道がドイツ留学であった。これまで「充分学び得なかった体育教師としての資質向上」に努めるため、ドイツに着くのは1965年秋のことになる<sup>63)</sup>。

この他、ウエイトリフティング部は9月と10月の間、オリンピックのために部活動を休みにし、5名の部員が参加<sup>64)</sup>、アーチェリー部<sup>65)</sup>と『校友会誌』編集部<sup>66)</sup>は1年生を除く全員が補助役員として参加したことが『校友会誌』の部活動年次報告において言及されている。

東京オリンピックへの補助役員としての参加は部活動に対し少なからず影響をもたらしたようである<sup>67)</sup>。いくつか事例を見ていきたい。

「打倒芝浦を第一目標」に掲げるハンドボール部では、レギュラーが前年から総入れ替えとなった影響もあり、新入生の「善戦」に期待できる点があったものの、春季リーグを2勝5敗という「みじめな成績」で終えていた。「この苦い経験を打破するために、より一層の努力を誓い合い、国体休暇を返上して合宿をするなど」チーム一丸となって練習を続けた。夏休みの全日本学生選手権では「関西で名を上げている」関西学院大学に対し前半に7点差をつけられるも後半追い上げを見せ「逆点するかと観衆を興奮させた」が2点差の惜敗となった。また全日本総合選手権では日体大クラブと大崎電機の「事実上の決勝戦」を観戦し「現役も、よしやらねばと」、残る秋季リーグの準備を始めたが、東京オリンピックに「全員補助役員として動員」され、満足な練習ができないまま秋季リーグに臨むことになった。なお秋季リーグの結果は4勝3敗であったが、1勝は「優勝校の芝浦工業大学」を5シーズンぶりに破ったものであった<sup>68)</sup>。

「関東随一」の実力である女子バスケットボール部では、全日本学生選手権大会で「二年連続準優勝という苦い経験」が続き、1964年度シーズ

ンの目標はその雪辱を晴らすことであった。しかし「十月に入り、オリンピックのため体育館の使用不可能、また補助役員という困難の中で、思うように練習ができず全日本学生を前に本当に苦しい期間」となり、またもや決勝にて苦杯をなめることになる<sup>69)</sup>。

全日本大学野球連盟に「今年の初めから…一大センセーションを巻き起こした『新連盟結成案』」によって首都大学野球連盟が誕生したのが1964年のことであった。日体大野球部は、「東海大・教育大・成城大・武蔵大」と共に東都大学野球連盟を脱退し、首都大学野球連盟に加盟する。この首都大学野球連盟への加盟は野球部にとって全日本大学選手権への出場を「身近」にするものであった。なぜなら東都大学野球連盟時には三部に所属しており、「全日本大学野球選手権試合に出場資格のあるのは一部だけ」であったからだ。首都大学野球連盟の場合「七校中の優勝校」が出場できる。春に行われた五校による親善試合において6勝1敗の成績で優勝していた野球部は「連続優勝を目指し」、夏合宿では「四十余名の部員が一丸」となり1日6時間から7時間の練習で「汗と泥にまみれた」。こうして臨んだ秋季リーグでは初戦の明治学院大学戦を1勝1敗1分の「まずまずのスタートを切った」。二戦目の武蔵大学戦では2勝を挙げ、勝点1を挙げる。そして三戦目の東京経済大学戦、ここでオリンピック開催によって組んだ「無理な日程」の影響が表れてしまう。「疲労気味で望んだ」結果、1勝2敗と勝点を挙げられずに終わる。続く四戦目の成城大学戦は1勝1敗1分。このタイミングでオリンピックが開幕しリーグ戦は中断となる。この間、「部員は役員となっていたのでコンディションの調整に最も悩まされた」。リーグ戦が再開し五戦目の相手は東海大であった。この一戦は「優勝を逃すか」「優勝を食い止めるか」の「最大の山場」であった。3試合の戦績は1勝2敗。優勝を逃す結果となり「涙をのんだのである」。シーズン成績は10勝6敗2分の勝点4で第2位であった。「優勝こそ逃した

が一応満足な成績であった」<sup>70)</sup>。

こうした補助役員としての参加だけでなく、聖火ランナーに青梅市にて遠藤良宏<sup>71)</sup>、足立区にて瀬戸陽子<sup>72)</sup>、大田区にて吉岡淳子（聖火リレー隊）<sup>73)</sup>、鴻巣市にて和田征夫<sup>74)</sup>と少なくとも5名が選ばれていたことが確認できる。

### 2-3. 動員の諸相

世田谷キャンパスの大体育館（旧5号館）は、1963年7月に着工し、東京オリンピックを目前に控える1964年9月12日完成した。コンクリート造りの5階建（2090坪）で、1階に柔道場とダンス場、2階に522坪の大アリーナを有していた<sup>75)</sup>。この体育館は直ちにバレーボール練習会場となる。

完成直前の8月4日、玉川警察署より東京オリンピックの練習場となる体育館の下調べの要望の連絡があり、14日午後1時ごろに下調べが行われている<sup>76)</sup>。22日にはオリンピック組織委員会からバレー練習会場のカーテンの寸法が測られ、28日になるとバレーボール協会が外国人選手係員を引き連れて練習場を見学していったという<sup>77)</sup>。バレーボールの練習会場は9月24日から10月22日まで使用された。大体育館だけでなく「第2体育館、第3体育館」も東京オリンピックの練習会場として提供し、バレーボールだけでなくレスリングの練習会場ともなっていた。こちらは9月22日から10月15日まで使用され、延べ人数で1592人が練習をした<sup>78)</sup>。

大会役員として、代表選手として、補助役員として、聖火ランナーとして、練習会場として、日本体育大学はさまざまな形で東京オリンピックを支えた。史料から確認できる範囲では教員120人の内21人が何らかの形で本大会に「参加」していたことが確認できる。また4学年合わせ2500人近い学生が在籍<sup>79)</sup>していたが、その内少なくとも400名近い学生が東京オリンピックに何らかの形で「参加」していた。こうした状況は、日本体育大学の日常に対し影響を与えた。9月初頭か

らの順次始まる学生たちの補助役員としての活動、授業も行われる体育館の2か月近い練習場としての提供は部活動の実施を困難にしていたし、後期授業は当初の2か月間「休講」となっていたようである。

### 3. 夢のあとに

1991年に日本体育大学創立百周年記念事業の一つとして、同窓会の回顧録が編集された。そこに1966年3月に卒業した山村徳男の回顧録が掲載されている。そこで、1964年東京オリンピックの思い出が次のように書かれている。

私達が幸運だったのは、東京オリンピックが三年生の時に行われたことでした。そのための新体育館（現在の校門右の建物）が建設され、寮も鉄筋コンクリートで深沢の坂上に造られたのです。大学も練習会場となり、オリンピックの前はいろいろな選手が来ました

山口県出身の山村は1962年（昭和37年）に「憧れの」日体大に入学した。その当時の様子を次のように記述している<sup>80)</sup>。

昭和三十一年に私の故郷山口県下関市の野球場で日体大の体操部の演技会が行われ、竹本先生・相原先生・池田先生などが日の丸を先頭にして素晴らしい演技を披露され、当時中学一年生の私はそれ以来「体操」に夢中になって日体大に来たのです

山村は中学時代に日体大の体操に憧れ山口県から上京する。四年間を学生寮で生活し、体操部で副主務も務め、「ふりかえれば四年間は練習と、アルバイト、読書の連続でした」<sup>81)</sup>と記述される学生生活を送った。その学生生活の中で、三年生の時の東京オリンピックは「幸運」の巡り合わせであったといえよう。山村は大会補助員としての経験も記述しているが、この件は後ほど取り上げ

るとして、もう一人の卒業生の回顧録を紹介しておこう。

1966年（昭和41年）3月に日本体育大学女子短期大学を卒業された竹本（旧姓村上）孝子の回顧である。竹本は1964年の入学で、進路の選択にあたっては恩師が日体大出身であったことや周りの人から「体育の教師になるのなら日本の中央でいろいろな大会を見たり、体験することが大切。ちょうどオリンピックもあることだし東京に行ったら・・・」<sup>82)</sup>というアドバイスを受けてのものだった。東京オリンピックは竹本が1年生の秋に開催された。当時の2年生以上は補助員として参加したが、1年生にその機会は与えられなかった。その当時の様子を次のように記述している<sup>83)</sup>。

オリンピック会場への切符も手に入らず、会場を目前にしながらか観戦は出来ず、駒沢など競技場を外からながめていた悔しい思い出もあります。上級生は毎日寮に帰って来ると、一日の出来ごとを楽しそうに話します。外国選手との興味ある話題などは我々一年生はうらやましい限りでした。世界が一つになり燃えているスポーツの祭典を目前に出来たことは本当に良かったと思っています

いまなお、はっきりと思い出されるのが女子バレーの決勝戦です。優勝を決めたあのシーンは昨日のこのように思い出されます。同じ東京にしながら実際に観戦できなかった無念さはあるけれど、雰囲気だけでも肌で感じ取れたことは東京に来て良かったと実感したものでした

竹本は1年生であったので上級生のようにオリンピックに参加できなかった。それでも進学に当たって周囲の人から受けたアドバイスはスポーツの祭典を身近に感じることで現実化したといえる。山村も竹本もいわゆる地方から上京して日体大に進学した。竹本氏は1年生だった1964年6月に国体休暇で帰省しているが、「あの頃はまだ新幹線もなく、夜行列車で約一時間という旅」<sup>84)</sup>だったと書いている。文中の記述から帰省先は福

山と推察されるが、今であれば東京—福山間は日帰り出張する日程である。しかし当時、地方から東京に上京することは時間的にも経済的にも現在の感覚とは異なっていた。竹本にとって、進学への周囲のアドバイスがもつ意味は、日体大であると同時に東京に行くことも含まれていたとみるべきであろう。東京オリンピックも、「史上最大のスポーツの祭典」とともに、「東京で」開かれることの意味があった。ここで一般化はできないけれども、少なくとも竹本にとって1964年の東京オリンピックは、現在のわれわれが抱く2020年の「東京」よりも象徴性を帯びていたといえるであろう。

当時の日体大の2年生以上は補助員などの形でオリンピックの競技運営に関わったことがうかがえる。山村は次のように回顧している<sup>85)</sup>。

大会期間中は一日500百円と制服・帽子が支給され、私は重量挙げの渋谷公会堂と柔道の日本武道館、閉会式の国立競技場に派遣されました。各会場ではいろいろな有名人を見ることが出来ましたが、三島由紀夫やまだ独身だった長島、王の若い頃、そして美智子妃殿下（現皇后陛下）を間近に見られたのは強く思い出に残ります

当時3年生だった山村氏は複数の種目、会場で補助員としてオリンピックに参加した。この手記では補助員としての経験について、これ以上のことは書かれていない。

当時の日体大は多数の学生が補助員としてオリンピックに参加していた。このような補助員として大会を支えた学生たちの奮闘ぶりを、当時の「日本陸上競技連盟審判部長として、競技審判員の人選、訓練、配置などの計画作成と実行を担当した」<sup>86)</sup>佐々木吉蔵教授の回顧を紹介しておきたい。

佐々木は審判部長として、大会補助員の選定に苦心していた。彼は審判部の会議で補助員をすべて学生とし、しかもすべて日体大生とする提案を行った<sup>87)</sup>。これに対して他の委員から反対があっ

たものの、この提案は承認された。佐々木は当初、日体大の学生たちに「服装、清潔感、端正さや教養のあふれる態度などの諸点について」不安を感じていたという。しかしそれは杞憂に終わった。以下、佐々木の記述である<sup>88)</sup>。

しかし訓練会毎に六十人の行動力や審判技能が充実しているのが目にみえた。そして、大会においては、学生らしさの中に競技人の風格とよきスポーツマンの教養を漂わせて、かつ用器具の整備配置に当たっては、それ以上は不可能と思われるほどの機敏な動作を実行してみせた。そして国際陸上競技連盟会長ならびに最高委員たちから『これまでのオリンピックで見られなかった高度の態度、技能であった』と最大の賛辞が送られた

競技の補助員は専門性が求められる。審判技能や用器具の整備配置についての佐々木の記述は、当時の日体大の学生たちの専門性が信頼に足るものであったことを裏付けている。それが競技役員からの賛美につながっていると思われる。60名の学生たちは佐々木の期待に任務遂行で応えた。

だが、当時補助員として競技実施に貢献した60名の学生たちのエピソードはこれで終わらなかった。佐々木は学生たちの気質に感激した様子を、次のように記述している<sup>89)</sup>。

大会直前のリハーサルを実施したとき、日本陸連は、競技役員の日給として五百円、学生補助役員のそれとして三百円を交付した。私は学生補助員が早朝六時から夜遅くまで、グラウンドの整備や用器具の点検まですることから、学生諸君への手当は少なくとも競技役員並みであるべきだと申し入れたが、予算の都合で無理だということでやむを得ず引き退って、学生諸君にそのことを説明した。「差別待遇と思わず、がまんしてくれ」私がそういうと、チームの隊長柴田洋君（陸上部マネージャー、県立尼崎校勤務）が代表していった。「先生、心配しないで下さい。私達は金で働いている

わけではありません。タダでもいいのです。私達は選ばれた光栄に感激しつつ、奉仕していますから。」そのとき、私は感激の涙がこみ上げて声が出なくなったのを覚えている

1964年の東京大会における陸上競技は、国立霞ヶ丘陸上競技場で10月14日から10月21日までの日程で行われた。マラソンでアベベ・ビキラが金メダル、円谷幸吉が銅メダルを獲得した大会であった。日本人にとっても記憶に残る大会の陰で、それを60名の日体大の学生たちが競技を支えていた。

1964年の東京オリンピックはそれへの期待とそれに関わった経験の両面で、学生たちに影響を及ぼした。しかしながら、人間の記憶は時間とともに薄れ、時には改変されていく。オリンピックも時間の経過とともに人々の記憶から消えていく。今日では、1964年の銅メダリスト円谷選手の悲劇を知らない学生も多い。1964年の記憶も永遠にとどまるものではない。竹本氏が次のように書いている。「教員になって数年はこの東京オリンピックの話は、生徒がよく耳を傾けよい話の種でしたが、だんだん東京オリンピックなど遠い昔のこととなり、ただ年齢差を感じさせられるだけで淋しい思いをするようになりました」<sup>90)</sup>。戦争の記憶が薄れていくように、オリンピックの記憶も時代を経る毎に薄れていく。オリンピックの物語を語り継ぐことは重要である。そしてそれ以上に記憶とは別の記録という形で、オリンピックの出来事を残すことも重要である。

## おわりに

日体大関係者の1964年東京オリンピックの記憶、そしてその経験を掘りおこしてきた。第一に意外ともいえるのが、教員たちが、東京オリンピックを客観的に、冷静に捉えて、その後の日本スポーツ界の姿を思案していた姿である。必ずしもこの平和の祭典に日体大関係者の誰しもが熱狂してい

たわけではなく、批判的な立場から東京オリンピックの意味を問おうとした体育学研究者たちの姿からは、果たしていまこれほどの冷静さはあるのだろうかと思わざるを得ない。

第二に教員や学生たちの回顧、報告から浮かび上がるのは、総力を挙げて東京オリンピックに尽力していた日体大の姿である。選手や役員だけでなく、補助役員として日体大の関係者は東京オリンピックを支えていた。一方でそうした尽力は少なからず大学の日常にも影響を与えていたことが確認できる。

第三に個々人の経験と記憶の中にあるオリンピックとその物語の継承についてである。経験や記憶というものが個人のものである以上、時を経れば薄れていく。竹下の語りから見える薄れもオリンピックがそれだけですべての人に伝わる万能の物語でないことを的確に指摘している。後世にオリンピックの物語をいかに継承していくのか、その記録の方法（＝歴史化）に関しては、今も昔も変わらず大きな問いとして残っていると見える。本稿はこうした記憶と経験を頼りに、いかにオリンピックの「遺産」を残すかの1つの試みでもあった。

日体大と東京オリンピックの記憶と経験のありようは、私たちに来る第32回夏季オリンピック大会の迎え方、かわり方、残し方を問いかけているのである。

#### 引用参考文献

- 1) 本稿では史料的制約の関係から東京オリンピックに焦点を当て、パラリンピックについては言及しない。1964年東京パラリンピックと日体大の関わりについては今後の課題である。
- 2) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編（1973）学校法人日本体育会日本体育大学八十年史。不昧堂：東京，pp. 1026-1027.

- 3) 学校法人日本体育会百年史編纂委員会（1991）学校法人日本体育会百年史。東京書籍印刷株式会社：東京，pp. 1013-1020.
- 4) 向井正剛（2008）オリンピックと大学生。仙台大学紀要，39（2）：95-99.
- 5) 中澤篤史（2010）オリンピック日本代表選手団における学生選手に関する資料検討-1912年ストックホルム大会から1996年アトランタ大会までを対象に。一橋大学スポーツ科学研究，29：37-48.
- 6) 東原文郎（2013）1912年～2008年夏季オリンピック日本代表選手団に関する資料-所属組織と最終学歴を中心に。スポーツ科学研究，10：242-316.
- 7) 森正明（2015）中央大学とオリンピック。中央大学保健体育研究所紀要，33：109-114.
- 8) 小林哲夫（2019）文武両道 戦前の学歴エリートたち。中央公論，133（11）：170.
- 9) 小林哲夫（2019）文武両道 戦前の学歴エリートたち。中央公論，133（11）：170-175。小林哲夫（2019）一九四〇年「幻の東京五輪」の学徒動員。中央公論，133（12）：200-207。小林哲夫（2020）慶應・東大ボート部栄光の軌跡。中央公論，134（1）：196-203。小林哲夫（2020）部の伝統ゆえ、オリンピックを辞退。中央公論，134（2）：224-231。小林哲夫（2020）転身いろいろ、競技も人生も大学名も〈一九五二～七六年〉。中央公論，134（3）：222-229.
- 10) 日本体育大学（1964）オリンピックと体育会を語る。学友会誌，（10）：70.
- 11) 同上誌.
- 12) 高田はこのことに関して次のように述べている。「このように、戦後の体育研究は、石津誠、川村英男、阿部忍、篠田基行、片岡暁夫たちにより基盤が作られ、さらに1990年代に入り、佐藤臣彦を中心に哲学的な研究へと展開していき、体育哲学の名称変更につながったということが出来るだろう」。高田哲史（2007）日本における体育哲学の学的形成に関する研



究—1920年代の数川與五郎の「体育哲学」を中心に—。広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, (56) : 59-66.

- 13) 石津誠 (1965) 第一号まえがき. 体育原理研究会編, 体育の原理. 不昧堂出版: 東京.  
また, 阿部忍は当時の様子を同書の中で次のように述べている。「思えば, 今から数年前, 体育原理研究の組織をつくらなければならないことを痛感した私は, 日本体育大学石津誠教授の激励を得, 東京教育大学前川峯雄教授とも何回となく, 研究会の設立について談合した。—中略—幸いにして, 石津, 前川両教授が中心となり, それから間もなく体育原理研究会が誕生し, 月に1度の月例会を持つことが出来た。最初は, 体育原理を体育哲学の方向で考えていこうとする石津教授や私の考えと, もっと幅広く体育全般の問題を取り上げていこうとする前川教授との間に討論もあったが, 根本は, 体育の本質に追究にしばって広く問題をとりあげていくことに意見はまとまった」。阿部忍 (1965) 体育原理研究のあゆみ. 体育原理研究会編, 体育の原理. 不昧堂出版: 東京. p. 130.
- 14) たとえば, 現在の体育概念としては佐藤臣彦による体育は関係 (教育) 概念であるとの立場が, 体育哲学の研究者によって支持されている。佐藤の体育概念については, 次の文献を参照されたい。佐藤臣彦 (1993) 身体教育を哲学する. 北樹出版: 東京.
- 15) 日本体育大学 (1964) オリンピックと体育会を語る. 学友会誌, (10) : 70-71.
- 16) 同上誌: 71.
- 17) 「見るスポーツ」は現在の日本において多様なプロスポーツの成立とともに流行を見せている。このことへの批判的な視点が, 2017年9月9日に行われた日本体育学会第68回大会体育哲学専門領域シンポジウム「反・反知性主義スポーツ論: 懐疑主義的スポーツ論」において鈴木明哲から提起されている。鈴木はス

ポーツが存続し続けることを「それはまた、『スポーツをする人』を大切にしてきた歴史の積み重ねでもあった」と述べる。それに対してスポーツがなくなった史実を古代ローマの剣闘士の決闘に求め, 視聴者や観客のおもしろさやスリルを求めることの危険性を指摘している。そして次のように述べる。「つまり, 現代の, そしてこれからのスポーツは『見る人』本位であってはならないということである。『見る人』本位では, アスリートの生命, 安全, 人権がないがしろにされてしまう」。2020年大会を3年後に控えた時点で, それを直接意図したものではないにしても, このような見るスポーツ隆盛への警鐘がなされている。

詳しくは次の文献を参照されたい。

- 関根正美・坂本拓弥・鈴木明哲・釜崎太・岡部祐介 (2018) 日本体育学会第68回大会体育哲学専門領域シンポジウム報告. 反・反知性主義スポーツ論: 懐疑主義的スポーツ論. 体育哲学年報, (48) : pp. 27-40.
- 18) 日本体育大学 (1964) オリンピックと体育会を語る. 学友会誌, (10) : 71.
- 19) 同上誌: 71-72.
- 20) 佐々木吉蔵・井上一男・宇土正彦・山田光 (1952) 最近における学校体育の諸問題—その解決をめざして—. 東風社: 東京, p. 3.
- 21) 佐々木吉蔵教授記念集編集委員会 (1982) 佐々木吉蔵. 第一法規出版株式会社: 東京, p. 326. 初出は1976 (昭和51) 年の学友会誌である。
- 22) 栗本義彦・石津誠・佐々木吉蔵・原田忠四郎 (1964) オリンピックと体育会を語る. 学友会誌, (10) : 72-73.
- 23) 同上誌, p. 73.
- 24) より厳密に言えば石津の専門は「体育原理」であるが, この体育原理の意味するところは現在の「体育哲学」とは異なる。現在の体育哲学は名実ともに体育学の一専門領域に位置づいているが, 本稿の1-1でも言及した

ように、体育原理は「実践」の位相をも含むものであった。本稿注6で触れたように、石津は体育原理研究を「理論と実践」の両輪で考えている。また、飯塚鉄雄は「体育原論」には目的論だけで方法論が不在であったことを指摘した上で、「したがって、体育原理は、体育原論という目的論の段階から、漸次、方法論に与えられる、つまりは、肉付けのある原理へと展開されて行くわけである」として、体育原理が必ずしも哲学的研究にとどまらず体育の方法をも射程に入れていることを述べている。いわば、当時の体育原理は、現在の授業研究、評価、経営管理、体力、保健などの諸領域に関する「原理」を人間教育の視点から追求することを意味していた。飯塚鉄雄(1965)体育原理の諸課題。体育原理研究会編、体育の原理。不昧堂出版：東京。pp.118-129.

- 25) 石津誠教授退官記念集刊行会編(1978)石津誠教授退官記念集。日本体育大学：東京、pp.118-119.
- 26) 体育原理研究会編(1965)体育の原理。不昧堂出版：東京。p.149.
- 27) 栗本義彦・石津誠・佐々木吉蔵・原田忠四郎(1964)オリンピックと体育会を語る。学友会誌、(10)：73-74.
- 28) 荒牧亜衣(2015)第30回オリンピック競技大会招致関連資料からみるオリンピック・レガシー。体育学研究、(58)：1-17.
- 29) 栗本義彦・石津誠・佐々木吉蔵・原田忠四郎(1964)オリンピックと体育会を語る。学友会誌、(10)：74.
- 30) 同上誌：75.
- 31) 同上誌：75.
- 32) 同上誌：75.
- 33) 竹本孝子(1991)遠くなった東京オリンピック。日本体育大学創立百周年記念同窓会回顧録編集委員会編、日体大同窓会回顧録。日本体育大学同窓会：東京、p.355.
- 34) この年間スケジュールは1965年発刊の『学友会誌』に掲載されたものである。日本体育大学(1965)学校行事。学友会誌、(11)：60.
- 35) 荒川清美(1965)水泳実習。学友会誌、(11)：68.
- 36) 大藤茂樹(1965)総務部。学友会誌、(11)：119.
- 37) 原田忠四郎(1965)多彩絢爛な日体大行事。学友会誌、(11)：67.
- 38) なお相羽好弘は東京オリンピック未出場である。
- 39) なお相原俊子の依頼状も届いているが、当時彼女は日体大に所属しておらず、東京オリンピックにも「主婦」として出場した。
- 40) 日本体操協会(1964)オリンピック東京大会体操競技候補選手合宿派遣依頼について、1964年5月31日。日本体操協会(1964)強化合宿選手派遣依頼について、1964年7月16日。日本体操協会(1964)オリンピック東京大会日本代表選手団役員選手の委嘱について、1964年8月4日。日本体操協会(1964)オリンピック選手強化合宿選手派遣依頼について、1964年8月31日。財団法人日本体育協会・日本オリンピック委員会(1964)オリンピック派遣依頼状、1964年8月31日。日本体操協会(1964)オリンピック東京大会日本体操選手団役員、選手の派遣方についてのお願ひ、1964年11月2日。
- 41) 日本水泳連盟(1964)オリンピック候補選手についてのお願ひ、1964年4月15日。財団法人日本体育協会・日本オリンピック委員会(1964)オリンピック派遣依頼状、1964年8月31日。
- 42) 榎本とく子(1964)8月26日(水)。昭和三十九年度上期(日)直日誌。
- 43) 日本フェンシング協会(1964)強化合宿派遣依頼状、1964年8月13日。財団法人日本体育協会・日本オリンピック委員会(1964)オリンピック派遣依頼状、1964年8月31日。日本フェンシング協会(1964)強化合宿派遣

- 依頼状, 1964年9月1日. 日本フェンシング協会(1964)強化合宿派遣依頼状, 1964年9月13日.
- 44) 財団法人日本体育協会・日本オリンピック委員会(1964)オリンピック派遣依頼状, 1964年8月31日. なお藤田徳明に関しては大学に派遣依頼書が残されていない. そのため表3にも未記載である.
- 45) 日本陸上競技連盟(1964)オリンピック候補強化選手及強化候補選手合同強化合宿に際しコーチ, 選手の派遣方ご依頼の件, 1964年4月22日.
- 46) 日本カヌー協会(1964)オリンピック候補選手についてのお願い, 1964年4月13日.
- 47) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)(財)オリンピック東京大会組織委員会競技特別委員会委員の委嘱について(承認依頼), 1963年4月9日. 日本陸上競技連盟(1964)貴学教授の本連盟への出向ご依頼, 1964年8月20日.
- 48) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)オリンピック東京大会国内聖火リレー係員の委嘱について, 1964年6月30日.
- 49) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)オリンピック東京大会競技役員 競技補助役員委嘱および派遣方要請について(岡野章), 1964年6月23日.
- 50) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)オリンピック東京大会競技役員 競技補助役員委嘱および派遣方要請について(江尻忠夫), 1964年6月23日.
- 51) オリンピック東京大会JOCコーチ団連絡本部(1964)オリンピック東京大会派遣役員願いの件(中田茂), 1964年9月8日.
- 52) オリンピック東京大会JOCコーチ団連絡本部(1964)オリンピック東京大会派遣役員願いの件(宗内徳行), 1964年9月8日.
- 53) 日本体操協会(1964)オリンピック東京大会体操競技補欠選手の強化合宿(相原信行), 1964年8月21日.
- 54) 日本体操協会(1964)オリンピック東京大会体操競技補欠選手の強化合宿(香取光子), 1964年8月21日.
- 55) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)オリンピック東京大会競技役員 競技補助役員委嘱および派遣方要請について(進藤満志夫), 1964年6月23日.
- 56) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)オリンピック東京大会競技役員 競技補助役員委嘱および派遣方要請について(稲垣安二), 1964年6月23日.
- 57) 財団法人オリンピック東京大会組織委員会(1964)オリンピック東京大会競技役員 競技補助役員委嘱および派遣方要請について(荒木郁夫), 1964年6月23日.
- 58) 小川成義(1965)二十四日に感じたこと. 学友会誌, (11): 90.
- 59) 戸田陽子(1965)選手村雑感. 学友会誌, (11): 26.
- 60) オリンピック東京大会組織委員会・日本陸上競技連盟(1964)オリンピック選手練習に関する役員派遣ご依頼の件, 1964年9月3日.
- 61) 原田忠四郎(1965)多彩絢爛な日体大行事. 学友会誌, (11): 67.
- 62) 日本体操協会(1964)オリンピック東京大会体操競技補助役員, 補助係員の委嘱および派遣方要請について, 1964年7月27日.
- 63) 瀧澤康二(2012)わが体操人生-57年のシュプール-定年退職を記念して. 照妙堂: 東京, p. 4.
- 64) 佐野隆(1965)ウェイト・リフティング部. 学友会誌, (11): 171.
- 65) 中野武四郎(1965)洋弓部. 学友会誌, (11): 162-163.
- 66) 岩永八十八(1965)編集後記. 学友会誌, (11): 188.
- 67) 一方でレスリング部はOB3選手の活躍を見て「先輩に続くんだという意気込みでオリ

ピック期間中も、リーグ戦一部上位を目指して練習を欠かさなかった」とのみ記述し、補助役員としての参加に関する有無は見られない。木野田和紀(1965)レスリング部。学友会誌, (11):169.

- 68) 大洞五十七(1965)ハンドボール部。学友会誌, (11):158-159.
- 69) 矢延美佐子(1965)バスケットボール部年間報告(女子)。学友会誌, (11):149-150.
- 70) 野間口英敏(1965)野球部。学友会誌, (11):160-161.
- 71) オリンピック東京大会聖火リレー青梅市実行委員会(1964)オリンピック東京大会聖火リレー走者の決定について, 1964年5月30日.
- 72) オリンピック聖火リレー足立区実行委員会(1964)オリンピック東京大会聖火リレー足立区走者決定による協力方要請について, 1964年6月9日.
- 73) オリンピック東京大会聖火リレー大田区実行委員会(1964)通知書, 1964年5月29日.
- 74) オリンピック聖火リレー鴻巣市実行委員会(1964)オリンピック東京大会聖火リレー走者派遣について, 1964年7月1日.
- 75) 日本体育会百年史編纂委員会編纂(1991)学校法人日本体育会百年史。日本体育会:東京, p.969.
- 76) 田島栄子(1964)8月4日(火)。昭和三十九年度上期(日)直日誌。榎本とく子・富永金一(1964)8月14日(金)。昭和三十九年度上期(日)直日誌。
- 77) 榎本とく子(1964)8月22日(水)。昭和三十九年度上期(日)直日誌。田中幸吉(1964)8月28日(金)昭和三十九年度上期(日)直日誌。
- 78) オリンピック東京大会組織委員会編(1966)第18回オリンピック競技大会公式報告書上:東京, pp.202-211.
- 79) この数字は『学校法人日本体育会百年史』に掲載されている卒業生の数(1964年度~1968

年度)から算出している。

- 80) 山村徳男(1991)練習とバイトと読書の連続。日本体育大学創立百周年記念同窓会回顧録編集委員会編, 日体大同窓会回顧録。日本体育大学同窓会:東京, pp.356-357.
- 81) 同上文獻, p.357.
- 82) 竹本孝子(1991)遠くなった東京オリンピック。日本体育大学創立百周年記念同窓会回顧録編集委員会編, 日体大同窓会回顧録。日本体育大学同窓会:東京, pp.354-356.
- 83) 同上文獻.
- 84) 同上文獻.
- 85) 山村徳男(1991)練習とバイトと読書の連続。日本体育大学創立百周年記念同窓会回顧録編集委員会編, 日体大同窓会回顧録。日本体育大学同窓会:東京, p.357.
- 86) 佐々木吉蔵教授記念集編集委員会(1982)佐々木吉蔵。第一法規出版株式会社:東京, p.321. 初出は1975(昭和50)年の学友誌。
- 87) これについて, 佐々木自身が次のように記述している。「私は審判部の会議の席上, いうまでもなく日体大学生を選定したいと提案した。提案の理由として『補助員はすべて学生とすることを前提とし, 補助員六十人のチームワークと, スポーツの場にふさわしい態度と, 闘志と情熱と行動力を堅持して, 大会前数回に亘る訓練と二週間に亘る大会における任務遂行を考えると, 私自身の審判部長としての責任遂行の立場も考え合せ, 六十名全員を日体大学生としたい』と述べた。」同上文獻。
- 88) 同上文獻, pp.321-322.
- 89) 同上文獻, pp.322-323.
- 90) 竹本孝子(1991)遠くなった東京オリンピック。日本体育大学創立百周年記念同窓会回顧録編集委員会編, 日体大同窓会回顧録。日本体育大学同窓会:東京, p.356.

(受理日:2020年5月12日)